# らしっく

自分らしく、粋なくらし

まちづくり・生涯学習情報誌

2011.7 Vol.30 | 百日紅号

さるすべり／さるすべりは、夏を中心に花を咲かせる高さ5メートルほどの木。中国では次から次へと花を咲かせ、百日にもわたってどこかに花を咲かせているので「百日紅」と呼ばれているそうです。次々と花を咲かせるさまは、人々の輪の広がりを想像させてくれます。


●特集「私たちの自然を守ろう!」…… P1
●らしっくキャンパス／らしっくコラム …… P4
●プラザ通信 …… P5
●らしっく情報の森 …… P9
●ひろしま八区イベントガイド …… P11

## 「私たちの自然を守ろう!」

里山ならではの財産を生かし魅力ある暮らしを創造する●特定非営利活動法人／小河内Oプロジェクト

教科書は自然の中に。五感で感じたことが学びになる●広島市ネイチャーゲームの会

学んで、調べて、実践。環境の大切さを子どもたちに伝える●広島環境サポーターネットワーク

らしっくキャンパス●似島臨海少年自然の家　施設ボランティア「海賊船」

「まちづくりに想う」●広島市立大学国際学部教授　大東和 武司

# 私たちの自然を守ろう！

自然環境の保護は、人間の生活と切り離しては考えられません。自然と人間の関係に向き合いながら、それぞれの視点で、自然への理解や環境保全を実践する団体を紹介します。

## 里山ならではの財産を生かし 魅力ある暮らしを創造する

### ［特定非営利活動法人　小河内（オー）Oプロジェクト］

http://ogauchi.web.fc2.com/

▲食品メーカーによる体験教室「食と農と環境」をOプロジェクトで実施。この日は、田植えとさつまいもの植え付け、料理教室などを実施した。

### 里ライフの再生を目指して

広島市の北西端に位置する安佐北区小河内地区。人口約540人の小さな地区で取り組む、地域おこしのNPO法人が小河内（オー）Oプロジェクトです。

小河内は国内の他の中山間地域と同様、高齢化や過疎化、農地や山林の荒廃などの大きな課題を抱えています。そんな中、地域の世話人らが集まり「小河内を魅力あるまちに」をスローガンに2008年、Oプロジェクトを設立しました。行政から協力を受けながらも依存しない、住民主体の地域おこしグループとして「安心・安全なまちづくり」「自然や農地を守る」「雇用と産業」「都市住民との交流」を柱とした活動を続けています。

### 山里の魅力を生かしたい

都市部との連携が必要との考えから、まちづくりをサポートしてくれる「小河内応援団」を公募。ボランティアとして、山の整備や草刈り、熊を里に来させないための柿もぎや、竹林対策のための竹の子掘りなどに協力してもらっています。協力を受けた地域の人にとっては生活のための作業ですが、都会の人には体験そのものが珍しく、喜ばれています。また小河内応援団には、小河内のまちづくりについてアイデアを募るなど活動がユニークです。

「中山間地域の負のイメージから、私たちは抜け出せないでいました。ところが、私たちにとって当たり前で、おもしろくもなんともないことが魅力だということを都会の人が教えてくれたのです。ここには日本の原風景や農村文化があり、これを後世に残すことは使命だと感じています」と理事長の渡辺眞作さん。

◀都市住民との交流イベントでは、ホタルかごを作った。地元の人の指導を受けながら、子どもだけでなく大人も夢中に…。

現在、食品会社のバックアップや、広島市内の商店会のサポートで、農業体験として休耕田に米を植える活動もしています。できた米は食用のほか一部は酒づくりにも使われ、日本酒が生まれるプロジェクトが始動しています。

### 地域の材料で エコ商品

地域の雇用や産業につなげたいと開発が始まり、完成した自信作があります。環境にやさしいリサイクル事業として考えた、割り箸の炭づくり。ところがアピールすべき利用方法がなかなか見つかりません。そこでアイデアを小河内応援団で募集。細くて火が付きやすいことから着火材として利用することが決まり、杉の枯葉と、バーベキューなどに使う木炭を1パックにした、炭のセットが出来上がりました。これを使えば、わずか5分程度で誰でも簡単に火をおこせます。割り箸はサービスエリアの飲食店やイベントで廃棄するものを譲り受け、枯葉や木炭は地元の材料を使うので、リサイクルに役立つと同時に森林の手入れにもつながります。試した人からは大好評で問い合わせも増えており、今年は炭窯を3台増設します。

小河内では、そのほかにも新しいアイデアが次々に実行されています。未来を先導する里ライフ創造のモデル地区として、今後はグリーンツーリズムにも力を入れていく予定です。

◀杉の枯葉・割り箸の炭・木炭がセットになった「弥太郎君」と炭窯。かつて行われていた炭づくりの技術・文化を伝承する役目も担う。



## 教科書は自然の中に。 五感で感じたことが学びになる

### ［広島市ネイチャーゲームの会］

事務局　TEL:0823-45-3256　http://naturegame.or.jp

### 「自然」を師として学ぶ

ネイチャーゲームというものを聞いたことがありますか？　アメリカ発祥の自然体験プログラムで、1986年に日本に上陸しました。広島市ネイチャーゲームの会は、約20年前に発足し、活動を続けています。

◀海での活動の様子。生き物を観察したり、海草を拾ったりする。海草の標本をつくる体験もできる。

自然の中で、ゲームなどのさまざまなアクティビティを通じて、自然の不思議や仕組みを学びます。「自然から学ぶ」という考え方を実践するため、指導員は「きっかけをつくる人」として子どもたちに接しています。

「子どもには言葉で説明しても伝わりません。五感で感じることが、自然を知ることになるんです。ネイチャーゲームを体験すると、物の見方が変わりますよ」と、設立メンバーの秋山浩三さん。

例えば、春先に一斉に芽吹く若葉。小さな子どもに「すごいね」と言っても伝わりません。でも葉の色を比べたり触って柔らかさを感じたりすれば、そこから自然を理解していきます。

### 五感を使った体験

ネイチャーゲームの代表的なものは、木の幹に抱きついて木のぬくもりを感じたり、聴診器で木の中の音を聞いたり、森の中で目隠しをして森の音に耳を傾けたり、落ち葉に全身をうずめ目だけ出して森を見上げたりするもの。五感をフルに使った体験をします。

◀葉っぱに埋まって、顔だけ出すというアクティビティ。自分が自然の一部になったような感覚になるという。

野外活動を行う団体はいろいろありますが、知識がないとできないものや、知らずにやると危険が伴うようなものもあります。しかしネイチャーゲームは、道具がなくても自然さえあれば、身近な公園などでも簡単にできることが魅力です。

運営委員長の住吉和子さんは児童館で働いていたとき、ネイチャーゲームを取り入れていました。「外で遊んだ子どもは、いろんなものを拾ってきます。葉っぱ一枚でも小石一つでも、観察すれば気づかされることがあるため、どんなものでも無駄にしません」。

### 多彩な活動で魅力を伝える

主な活動は、広島県緑化センターを拠点に行っています。江波山気象館のネイチャーサイエンスも担当し、学校の課外活動の支援をすることもあります。

ここ数年の新しい取り組みとして、年間を通じた「田んぼの楽校」を開催。農業体験とネイチャーゲームをミックスさせた体験学習で、必ず親子で参加してもらいます。子どもだけが体験しても、経験がない親が多いため家で共有できず、体験の効果を最大限に生かせないからです。

秋山さんは、「ネイチャーゲームと言うだけで、すぐ分かるくらいにネイチャーゲームを広げたい」と意欲的。魅力を伝えるために、ほかの活動との融合も目指しています。

◀年間を通して田んぼに関わる「田んぼの楽校」。稲作後のレンゲ畑に、子どもたちは大はしゃぎ。

# 学んで、調べて、実践。環境の大切さを子どもたちに伝える

## 【広島環境サポーターネットワーク】

http://hiroshimakankyonet.com/

### 5つの部会で環境調査

広島環境サポーターネットワークは、自然環境の調査などを通した環境保全活動や、行政と協働での環境イベントなどを実施する市民環境ボランティア団体で、約700人の会員が活躍しています。

設立は1996年。広島市環境局が主催した「広島市環境サポーター養成講座」を修了した人たちが集まってネットワークを結成しました。翌年からは太田川放水路で環境調査活動を行うための河川部会と、宇品周辺の海岸をフィールドとした海洋部会がスタートし、以降、森林整備を主な活動とした森林部会、台所から環境を考える生活部会、環境問題の背景を考える国際交流部会と、計5つの部会が発足しました。

各部会は毎月1回程度、定例会を開催。観察会や現地調査、保護活動や市民の意識調査などを行っています。活動内容は報告書にまとめられ市や県、環境省にも提供されています。

◀「環境の日」ひろしま大会では、エコエ作などの体験や、広島の川の生物を紹介する展示を行った。

### メンバーの多彩さが魅力

ネットワーク全体での取り組みとして、広島市が実施する「広島地球ウォッチングクラブ」事業の企画・運営を行っています。毎年、山や海、川などのさまざまなフィールドを舞台に開催する自然体験を通じた環境学習には、毎回50～60人の子どもたちが参加しています。イベントの企画は実施するフィールドに精通したサポーターを中心に植物係、生物係など、メンバーの得意分野を生かした役割分担や配置を行い、約30人体制でリハーサルを重ね、1年間かけて周到に準備を行います。手づくりイベントながら環境教育プログラムとしての完成度は高いと自負されています。

「どの場所でも、そのフィールドに精通したメンバーがいる。どんな分野でも、その分野を得意とするメンバーがいる。この層の厚みが私たちの強み。700人のマンパワーを生かし創意を凝らした活動をしていきたいですね」と事務局長の増村浩子さん。

◀「水道探検隊」では小学生が、太田川の上流や、源流のある森を訪ねて、森と水の関係を学ぶ。

### 重ねた実績に高い評価

公民館や小中学校への出前環境講座なども行っています。太田川上流探検、身近な廃材を利用したリサイクル工作など、市民レベルでの環境保全・啓発活動を行っています。2009年度には、89事業に約6300人が参加しました。

各イベントは、メンバーが学習会などを通じて身につけた知識や経験を生かす場にもなっています。

2006年にはひろしま環境賞、広島市民表彰、2007年には環境大臣表彰を受賞するなど活動は高く評価され、各地の地方自治体が視察に訪れています。

増村さんは「自然や生き物たちとの関わりなくして人間の繁栄はありません。それらの大切さを通して環境を考えられる大人になってもらいたい。そのきっかけづくりのお手伝いです。さらに活動内容の質を高め、充実したものにしていきたいと思っています。」と力を込めて話してくれました。

◀地球ウォッチングクラブで、瀬野川の釣りと水中生物調査を行った。たくさんの生き物を発見し、子どもたちは大興奮。



らしっくキャンパス

# 自然の中で子どもたちに笑顔と感動を

今回のらしっくキャンパスでは、似島臨海少年自然の家の施設ボランティアサークルである「海賊船」に取材に行かせていただき、代表の住田さんにお話を伺ってきました。

似島臨海少年自然の家
施設ボランティア「海賊船」
代表　住田 栞理（しおり）さん

似島臨海少年自然の家の施設ボランティアである『海賊船』は“子どもたちに夢を与えること”を目的に1986年に設立されました。現在は26期代表の住田さんを中心に学生や社会人など計4名で活動されています。

毎週のミーティングでは、月に数回施設の主催で開催されるイベントの補助スタッフとして、子どもたちと一緒に行うレクリエーションの案を練っているそうです。イベント内容はカヌーの指導やミカンを育てるほか、広島が発祥であるバウムクーヘンの手づくりなど盛りだくさん。なかでも冬に行われる「あつまれ似島」というキャンプは、海賊船が全て一から企画内容を考える大掛かりなイベントです。いつも最初に目的や方向性を決めてそこからずれないように考えていくそうです。昨年のキャンプでは「自然を楽しんでもらうこと」「友達の輪を広げてもらうこと」を目的に企画案を練っていきました。3時間の話し合いでは時間が足りないときもあったそうです。キャンプ当日は夕飯の食材を入手するための宝探しなど、子どもたちを楽しませる工夫がたくさん盛り込まれました。「3カ月もかけて考えて準備したキャンプもたった2日であっという間に終わってしまう。でも子どもたちの笑顔を見たときや、お礼の手紙を貰うと達成感を覚えます。」と住田さんは嬉しそうに語ります。

子どもとの接し方が分からず悩むこともあるそうです。そんなときいつも支えてくださるのが歴代のOB・OGの皆さん。おかげで縦の広がりが増え、島に渡るたびに得るものがたくさんあるといいます。「海賊船の活動を始めてから、視野が広がり積極的になった。学校では学べない経験ができ毎日が充実している。」

普通の学校生活を過ごすだけでは感じることのできない楽しさと自然の魅力が住田さんたちを動かすのだと感じました。

自らが幼いころ似島で体験したキャンプで憧れた“やさしいお姉さん”を目指して海賊船は来月も似島へ渡ります。

子どもたちと触れ合うことだけではなく、「子どもを預かっている」という責任感もある中でのイベント企画は発見と試行錯誤の連続なのだろうと感じました。同年代の方の大きな取り組みはとても刺激になりました。住田さん、本当にありがとうございました。

レポーター　広島経済大学　松田 詩織さん

## 第9回 らしっくコラム

こちらのコーナーでは、市民活動、ボランティアについて研究されている大学の先生に「まちづくり」についてお聞きしています。市民主体のまちづくりや生涯学習について、ご自身の研究内容や体験などをふまえ、さまざまな視点からお話いただきます。

# まちづくりに想う

### ～次世代のまちづくりを担う若者に向けてのメッセージ～

原爆ドーム近く本川小学校前で、日本泳法神伝流広島游泳同志会の仲間と、夏に冬に泳いだ思い出がある。冬は成人式前後の寒中水泳であった。それは、中・高校時代、また広島を離れていた大学時代も含め、10年近く続いた。

その当時の市内の川は、ゴミがたくさん浮き、流れ、とてもきれいな川とは言えなかった。そんな川での鍛錬や奉納游泳には、流派として、また会として、いろいろな思いや考えを伝えていくという意味があったのであろう。

その後、広島を離れていたこともあり、仲間と泳ぐ機会もなくなった。

しかし、2000年に縁があって、広島に戻ってきた。まだ泳ぐ機会は得てはいないが、川辺には何度も足を運んでいる。きれいになった。四半世紀の間に見違えるほどきれいになった。

フランスの経済学者ブードヴィルに次の言葉がある。「人間は空間の中に、生きているだけではない。人間は空間をつくる。人はまちをつくり、文化を文明をつくる。人は歴史と同じように地理をつくりだす。」林雄二郎は、それに続けて次のように言う。「同時に人間は空間によってつくり直されつつあるのではないだろうか。」

広島は言うまでもないが、太田川河口の三角州に広がって発展してきた。7つの川は6つの川になったが、川が広島市街を隔て、そしてまた川でつながっている。それはまた源流の吉和から103キロにわたり流域をしっかりと結びつける流れでもある。その川への長く強い思いがきれいにさせた。不断の進化といってもいい。

意思が集まり、意志を貫けば、まちはできる。そのまちが人をつくり直す。その繰り返しがさらによいまちにつながっていく。そうした進化の歴史が長く連なっていけばと想う。

**大東和　武司**　おおとうわ たけし
■所属・役職　広島市立大学国際学部教授
■活動概要　専攻は多国籍企業論。主な業績には、『国際マネジメント』（単著）、『グローバル環境における地域企業の経営』（共編著）、『サービス産業の国際展開』（共編著）などがある。国際学部長など歴任。国際ビジネス研究学会常任理事ほか。